



物産フェアの会場では、初めてのサトウキビ搾りにドキドキする子どもや、お客さんとのやりとりを楽しむ関係者の笑顔が溢れました

終わりに

西郷がつなげた2つのまち。

けれど、本当につなげたのは龍郷町と菊池市に住む人だと思えます。西郷がつなげた縁を、切れないように、未来につながっていくように、自分たちの手で交流を続けていきます。

人が伝えなければ文化が消えてしまうように、交流も続けなければ途絶えてしまうでしょう。つなげたのが人なら、つなげていくのも人です。

海のように穏やかで、人が集まれば楽器を鳴らし踊りが始まる島に受け継がれていく文化、思い、景色。そこには菊池市と違う時間が流れています。違うけれど、そこに暮らす人の優しさは同じで確かにつながっていると感じました。交流を通して、物流を通して、龍郷町と菊池市はつながっています。

これから生きていく人が、その先をどうつないでいくのか。2つのまちは、これからどうつながっていくのでしょうか。

—問い合わせ先—
菊池源吾に学ぶ会について
 事務局(国際交流課)
 ☎(25)7252



龍郷町で生まれた「龍郷柄」



図柄に沿って色付け作業
 大島紬は細かい作業を何度も繰り返してようやく完成します

紬発祥の地と言われ、龍郷柄など独自の図柄を持ちます。
 しかし、現在は収入にならないなどの理由で若い人の就業率が減り、作りの減少に歯止めがかからない状況です。また、織る人の平均年齢は70歳を超え、その技術が消えつつあります。まちではこの技術をつないでいこうと保存会などが立ち上がり、大切に守られています。



大島紬を織る時に使う道具は、もう製造中止になってしまい、人々は修理を繰り返しながら大切に使っています

消えつつある 技術をつなぐ

奄美大島の特産品の一つ、「大島紬」をご存知でしょうか。
 泥染めした絹糸を手織りしたもので、一つ織るのに1カ月以上かかると言われています。何十回と染める作業を繰り返して、一つひとつ丁寧に束ねられた糸を決められた図案に従って細かく色をつけ織っていきます。そんな気の遠くなるような作業を経て、ようやく一つの糸が完成するまで、朝晩の真物となったり、役人以上でなければ着ることを許されない時代もあった大島紬は、世界三大織物の一つとも言われます。龍郷町はこの大島

平成19年2月に、初めて菊池市内6カ所の第3セクターで開かれた奄美物産フェアから3年。

今年もまた奄美からたくさんの特産品が届き、物産館や各道の駅で奄美物産フェアが開かれました。会場には、龍郷町の特産品である大島紬や黒糖、パイナップル漬けなどたくさんの品が並び、訪れた人たちは珍しい品物を手にとり眺めていました。
 ※「いも〜れ・うがみしょうら」とは、奄美大島に伝わる方言で、「いらっしやい・はじめまして(こんにちは)」という意味。

ういも〜れ がみしょうら

私が生きるのはこの島だ

会場で龍郷柄の紬を使った法被を着ていた川口さん(写真左)は、龍郷町役場に勤める職員。今回同行した理由を聞くと、「菊池にはずっと来てみたいと思っていました。だから誰か行かないかって話が出た時、真っ先に手を上げたんです」と笑って教えてくれました。「進学で福岡に住んだことがあるんですが、ずっと島に帰りたいって思っていましたね。ここは私の生きる場所じゃないって」どうしてそう思うのか聞くと、まず海の色が全然違つて、目を輝かせます。空の色を映した海は

きゅらむんの 奄美物産フェア開催

「きゅら」とは、奄美の方言で美しいことを意味します。人にも物にも使う言葉で、今でも島民の間で使われているそうです。

きゅらな人と特産品が集まった今回の奄美物産フェアでは、メロンドームで搾りたてサトウキビジュースの試飲などが行われました。佐賀県唐津市から訪れた夫婦はジュースを勧められ、「小さいころ、サトウキビを食べたことがある。久しぶりに食べた。小さかったからよく覚えてないけどこんなに甘いんですね」と言って懐かしいと口を揃えます。熊本市から訪れた親子は搾る前のサトウキビをかじりその甘さに驚いていました。



普段見ない物もあり、珍しそうに眺めている買い物客



軽快な三味線の音と唄が鳴り、踊りが披露されました